山岡鉄舟研究会　2008年初夏のイベント『靖国神社参拝と史跡見学』ご案内マップ

一

靖国神社（写真は拝殿）
当日は本殿での正式参拝です。
その後講話と遊就館見学。

二

神道無念流
「錬兵館」跡見学。

その後参道を通り、
正門へ。
途中おみやげ屋
さん・休憩所あり。

三

「富士見一丁目」
町名由来板。

小野家の跡地の記述
があるので確認しま
す。

四

小野家跡地。
現在はビルが建っている。
その後、木戸孝允宅跡通過。

五

筑土神社。
油断していると
見落とします。
参拝後、裏の階
段を抜けて靖国
通りへ。

六

蕃書調所跡。
立て札と看板が
残されている。

懇親会まであと
ひと息…。

七

九段会館到着。
お疲れ様でした！いざ懇親会！

八

散策コースは、平地か、下り坂です。
足腰に自信のない方でも安心して歩いていただけますよ！

二　神道無念流「練兵館」跡

「神道無念流」（しんとうむねんりゅう）とは、福井嘉平によって創始された剣術の流儀。
特徴は、「力の剣法」と言われる如く、「略打（軽く打つ）」を技ありとしてすら取らず、したたかに「真を打つ」渾身の一撃のみを一本とした点にある。
「練兵館（れんぺいかん）」とは、斎藤善道（初代：斎藤弥九郎）によって、文政９年（1826年）、九段下神田俎橋畔で開設された、幕末の代表的な道場。
ただ、天保９年（1838年）の火事で類焼したため、この地に再建され、その後　３０年間隆盛を誇った。
特に、桂小五郎（後の木戸孝允）は、剣の腕前に優れ、師範代も勤めている。　また、伊藤俊輔（後の伊藤博文）も出入りしていたと言われている。
　幕末の江戸三大道場のひとつで、「位は桃井、技は千葉、力は斎藤」と言われた。
「技の千葉」は、千葉周作によって、文政５年（1822年）、神田お玉ヶ池で開設された「玄武館」と言い、「北辰一刀流」剣術。
門人として、坂本龍馬、清河八郎、山岡鉄太郎など。
「位の桃井」とは、桃井春蔵によって、京橋蜊（あさり）河岸で開設された「士学館」と言い、「鏡新明智流」（きょうしんめいちりゅう）剣術。
門人として、武市半平太、岡本以蔵など。

三　富士見一丁目　町名由来板

「町名由来板」とは、千代田区内の由緒ある町名にまつわる歴史や文化を後世に伝えるため、町名の歴史、由来、変遷をモニュメントとして設置したもので、現在　区内108箇所に設置しています。
「富士見」とは、この界隈が「富士見」（ふじみ）と呼ばれるのは、文字通り、町内から富士山の雄姿が眺められたことに由来します。
九段坂を上りきった台地に位置する富士見一丁目は、まだ高いビルがなかった時代には、どこからでも富士山がくっきりと眺められたと言います。
ここが、「富士見」と呼ばれるようになるのは、明治時代に入ってからのことです。
江戸時代、武家地には正式な町名はありませんでした。
この界隈も、旗本が多く住む武家地だったので、明治５年（1872年）になって、初めて「富士見町」と名前が付けられました。
当時の「富士見町」は、靖国神社から九段までを含むかなり広い地域を指す町名でした。
区分けも、一丁目から六丁目まであり、現在の富士見一丁目は、富士見町六丁目と呼ばれていました。

四　小野家　跡地

昨年９月例会「弟たちの世話に明け暮れる」の講演資料より抜粋。
嘉永５年（1853年）７月、鉄太郎（鉄舟）は両親の相次ぐ死で、飛騨高山から江戸に戻った。
戻った先は、異母兄の小野鶴次郎（古風）の屋敷であり、鉄太郎の後ろには５人の弟が連なっていた。
金五郎、忠福、駒之助、飛馬吉、それと末弟の務は２歳の乳飲み子であった。
異母兄である小野鶴次郎の屋敷は、元治元年（1864年）の江戸切絵図に掲載されている。
当時の歩兵屯所の跡地が、現在の靖国神社、その青銅の大鳥居の北側に九段高校、白百合学園があり、その奥に衆議院議員宿舎があるが、その中間あたりに鶴次郎の屋敷があって、現在の千代田区富士見一丁目１１番（日本化薬の左隣、栗田九段ビルのところ）である。
なお、このあたりは旗本屋敷が多く、年々歳々役職が変わっていくので、そのたびに移転が多く、切絵図はたびたび改変されている。
因みに、安政３年（1856年）の切絵図を見ると、同所は小野朝右衛門で六百石となっていて、切絵図の記載から鶴次郎が小野家を継いだことが判る。
この鶴次郎について、小倉鉄樹の著書『おれの師匠』（島津書房）に「異母兄小野古風は凡庸の資で、取り立てて云ふほどのこともない。・・・・・」
と記されている。

五　木戸孝允邸　跡

「木戸孝允邸跡」は、千代田区九段北二丁目２番の西南角、現在の九段高等学校グランドのところにありました。
木戸孝允（たかよし、または　こういん）は、維新の三傑（薩摩の西郷隆盛、大久保利通）の一人である。
吉田松陰の弟子、長州正義派、江戸は桃井春蔵の「錬兵館」塾頭たる剣豪、留学希望・開国・破約攘夷の勤皇志士、長州藩の外交担当者、指導者、長州藩庁政務座の最高責任者として活躍するが、志士時代には徹底的に闘争を避け「逃げの小五郎」と呼ばれた。
妻は、動乱期の命の恩人、かつ　同志でもある京都の芸妓：幾松（後の木戸松子）である。
木戸孝允は、純粋で律儀、地に足の着いた開明派巨頭であったため、政策や手法を巡って、およそ心外の権力闘争が繰り返され続ける明治政府の中にあっては、結局　最後まで心身を害するほどの精神的苦悩が絶えなかった。
昭和２１年（1946年）元旦、昭和天皇による「人間宣言」の際、戦後の大方針として、彼の「五箇条のご誓文」が改めて示された。
晩年、皇居に近い九段北の本邸の他に、駒込に「染井別邸」を設け、心許せる友を此処に招き、時には　近くの六義園を散策し、疲れ切った体と心を癒やしていました。
現在でも、「明治天皇行幸所木戸別邸」と刻まれた石碑が電通生協会館の右隣に建っています。
（現在の文京区駒込一丁目）

六　筑土神社

築土（つくど）神社とは、旧称：津久戸大明神、江戸明神、田安明神と言われ、祭神：（主神）天津彦火邇々杵尊（あまつひこほのににぎのみこと）、（相殿）平将門、菅原道真とし、鎮座地：千代田区九段北一丁目１４番に鎮座する。
天慶３年（940年）６月、江戸の津久戸村（現在の千代田区大手町付近）に平将門の首を祀り、「津久戸大明神」として崇められた。
文明１０年（1478年）、大田道灌が江戸城の北西に社殿を造営し、江戸城の鎮守とした。その後、九段坂上（現在の千代田区北の丸公園付近）に移転させられて、以降は「田安明神」とも呼ばれ、日枝神社、神田明神と共に江戸の三社のひとつにも数えられることもあった。（江戸三社のうち、日枝神社、神田明神以外は固定していない）
その後、元和２年（1616年）に、江戸城外堀拡張により、現在の新宿区築土八幡町へと移転し、江戸時代以後も移転を繰り返して、現在地に移転しました。
また、戦災で焼失するまで、平将門の首を納めたという桶が社宝として伝わっていた。
なお、築土神社は、武勇長久の神社として親しまれ、千代田区北の丸公園にある日本武道館の氏神でもある。
毎年正月に授与される勝守（かちまもり）は有名。
そして、平成２年（1990年）には、鎮座1050年記念大祭を挙行し、平成１８年（2006年）築土祭では、安政６年（1859年）の神田明神以来、実に１４７年ぶりに『神輿渡御行列』の江戸城入りを果たしています。

七　蕃書調所　跡

蕃書調所（ばんしょしらべしょ）とは、江戸幕府の洋書翻訳、洋学教育、洋書および翻訳書の検閲、印刷・出版などを行った機関である。
文化８年（1811年）、幕府の天文方に置かれた翻訳機関「蛮書和解御用」（ばんしょわげごよう）の機能を引き継ぐ形で、安政３年（1856年）に設立する。
アメリカのペリーが黒船を率いて来航し、幕府に開国を求めたのが嘉永６年（1853年）、と翌年の神奈川条約締結以後、軍事・外交面の充実を図るために安政２年（1855年）、九段坂下に「洋学研究所」を設け、翌安政３年（1856年）に、「蕃書調所」と改称しました。
教官には、箕作阮甫（みつくりげんぽ）・寺島宗則・村田蔵六（後の大村益次郎）らが居ました。
入学資格は、旗本・御家人に限られていたが、のち陪臣にも認められた。
設立当初は、語学教育が中心だったが、万延元年（1860年）以降の科学・数学など専門学科新設に伴い、文久２年（1862年）「洋書調所」、翌文久３年（1863年）「開成所」と改称し、慶応元年（1865年）からは軍学校の機能も兼ねた。
「開成所」の教官には、西周・津田真道・加藤弘之など、後の「明六社」のメンバーとなる者も居た。
維新後は、明治政府に引き継がれ、やがて　明治１０年（1877年）４月１２日に「東京開成学校」と「東京医学校」が合併して「東京大学」となり、日本で始めての近代的な大学が設立された。（なお、この４月１２日は、現在「東京大学記念日」となっていて、この日に入学式を行っている）
そして、旧「東京開成学校」を改組して法・理・文学部の３学部、旧「東京医学校」を改組して医学部を設置する。